

明治四十一年前半年今

盛岡顯心會



明治三十一年二月廿四日 第三種郵便物認可 (毎月一回)

統一

第百六十一號

目次

佛陀觀に就いて(四)
 當 體 義 抄(六)
 久 遠 の 本 佛 (自我獨語三)
 日蓮上人に關する疑問に答ふ
 華道常 林 寺 日 寬 師
 佐 渡 靈 蹟 紀 行 (二)
 法華經信者としての桃中軒雲右衛門
 宗 務 廳 錄 事
 雜 報
 教學財團公告

本多日生
 坂本日桓
 關田養叔
 本立院日誓
 松尾忍水
 川崎英照
 花房生

佛陀觀に就いて(其四)

本多日生

(5) 審美的妙相

佛陀は、吾人の智情意に於ける全欲求を満たす完成者なることは、初めに之を述べて置きました。吾人の理性は眞を目的とし、意思は善を標準とするが如く、吾人の感覺は美を極致とするものでありまして、吾人の感覺上の欲求としては、美の頂點を捉へんとするは必然の希望と言ふべきである。

この美に就いて、美學上には、現實美と云ひ、理想美と云ひ、理想美には、抽象的理想美と、具象的理想美とを分ちて、幾多の論争を経たれども、今は具象的理想美を美の頂點とすることは、識者の論明せる所でありませぬ、この具象理想を絶對に見るを全理想と云ひ、之を個体中に縮現するを分理想と稱して居る、又全理想は、感覺の縁を超絶せるが故に美として認むることが出来ぬ、唯個体中に絶對を縮現したる分理想に於て

のみ美は認め得べきである

更らに美と眞との關係を見るに、自然科学に所謂眞は、主觀の意識の内容と、客觀の現象との吻合するを謂ふのである、されど純正哲學に所謂眞の目的とする所は、意識の内容と、客觀の本体との一致を意味して居るのである、故に自然科学にて眞を経験的眞理と稱するに對して、純正哲學にては眞を超絶的眞理と云ふのである。

知識欲に豊かならざる者は、經驗的眞理を得て満足するであらうが、世界人生の眞意義を領悟せんとする者は、超絶的眞理に達せなければ満足の出來るものではない。

この超絶的眞理が、高遠に認識せらるゝほど、美に接近することが愈々近くなつて、遂に眞美一体となるのである、要するに眞理が、經驗哲學や自然科学の範圍内に局限せらるゝ間は、眞と美とは相乖離して居るけれども、純理哲學の範圍に入れば、この乖離は打ち消されて眞と美は接近するのである、前者は美の價値を

認むることが出来ない、されどまことの美とまことの眞とは、必ず一体なるべしとの希望は、人心の最深秘處に本くものであるから、如何が淺薄なる自然科学なきの假定知識に依りて打ち破らるべきものであらう

巴上は今日の美學上の研究に於て論明せられて居る所であるが、これ等の思想が古くより佛教の佛陀觀に關して講明せられてあるを見れば、驚かぬものはなから

佛教に娛樂を採用するか否かに就いては、順權方便經(經大藏十卷)に「先づ一切欲樂の樂を以て而も之を娛樂し、然して後乃ち勸化するに大道を以てす」と説き、全本異譯の樂瓔珞莊嚴方便經(四五、〇オ)には「若し此の樂と莊嚴との方便を以てせずんば、一切衆生を教化すること能はず」と示されてある、又同經(四五)には乾燥なる小乘の消極的修行と、娛樂主義を採用せる大乘の積極的修行とを比較して、一の譬を擧げてある「大德舍利弗よ、我れ今喻を説かん、琉璃碗を以て

と説かれてあつて、禪宗にては、この無相の佛を尊重して居るが、これは丁度抽象的の理想であつて、未だ具象的理想の美の價値に達して居らぬのである

首楞嚴經には、佛が阿難に對して、汝は當初の發心、我が法の中に於て、何に感ぜしが爲めかと問はれ、阿難は「我れ如來の三十二相の勝妙殊絶にして形體映徹すること、猶ほ琉璃の如きを見上りて、常に自ら思惟すらく、此の相は、是れ愛欲の所生に非らず、乃至是を以て渴仰して、佛に従ふて剝落せり」と答へ上つて居る、この如來の勝相を見て發心したのは、正しく美感の上より來れる宗教心を表白したものである、されど是は、現實の色身に於ける肉眼所對の美であつて、丁度現實主義の美と一つであつて、未だ具象的理想美に進んで居らぬ故に、この次の經文には、これを法身に將ち行きて教誡せられて居る、この佛陀は劣應身佛の相と稱するのである

又同經に、自己均佛の邪見を誡め給ふて居る、「其の人先づ魔の著けるを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得と言

水精珠を盛り、無價寶を以て囊穢中に置く」と云ふのである、吾人の感覺より起る娛樂は、感覺それ自身の性質は必ずしも貴きものではないが、然しこの感覺が、絶對美を個体に縮現せる分理想の美に對して動く場合には、時に佛陀に接近し抱合して尤も力ある感應を起す大作用を有することを會得せねばならぬ、この意義に於て法華經の如きは、序品よりして天華妙色繽紛として乱れ墜ち旋轉として來下し、天鼓自然に鳴つて妙法音を宣ふるの光景を擧げ、この妙色妙聲は、已に會衆をして恍として理想の園に遊ぶの感あらしめたのである

さて佛陀が審美的妙相であつて、吾人の美感に最大満足と與へ、由て以て光明ある信仰を煥發する所以を述べべきであるが、この一段は、佛教徒の多數が誤解を藏し、美感に就いて釋劣なる見地に坐せるものがあるから、先づ佛教の全体に亘りて論ずる必要があると思ふ

金剛般若經には、相を以て佛を見るは魔の眷屬なり、

ひ、彼の元を求むる善男子の處に來つて、座を敷き法を説き、身に威神有つて、求むる者を摧伏して、其の座下をして未だ法を聞かずと雖ども、自然に心伏せしむ、是の諸人等、佛の涅槃菩提法身を將つて、即是れ現前の我が肉身の上にとありとす、父々子々遞代相生ずれば、即是れ法身の常住にして絶へざるなり、都べて現在を指して即ち佛國と爲して、別に淨居及び金色の相無しと云ふ」この文は、金色の妙相身を否定して、自己を佛身と謂へる邪見を破するものであつて、言々今の禪僧に加ふる鐵槌てはあるまいか、この場合の金色相は、實在身に就いて言ふものなれば、現實を超へて理想美に進めるものと思ふ

美術史に依れば、佛の三十二相も理想化したる美感の産物なりと云ふ、其は現實の生身の佛陀に於て、多少の理想美を加へたるものならんは異議なき所なるも、今は現身の佛陀、則ち肉眼所對の佛陀を劣應身と稱する教系よりして、之を現實美と云ふのである、この現實美に深遠なる意義を顯はして、實在身として猶絶對

理想を個体中に縮現せる應即法身の思想に於て、分理想の美を認むるとは區分を要する點であると思ふ天台智者大師の法華止觀の一に、十種の發心を明かすを見るに、第一に、種々の理を推して菩提心を發すを擧げ、次に、佛の種々の相を觀て菩提心を發すことを示せり、その中に、四佛を擧げて、三藏、通教、別教、圓教の四教に配せり、三藏教は、父母生身の身相、相好纏結し世間に希有なりとせる劣應身佛の相を見、通教は、如來の相好は、虚空の如く相、相にあらざらず、則ち勝應身の相なり、別教は、佛身は明淨鏡に衆の色像を觀るが如くに、一切現せざることなく、又一々の相好その邊を見ず、無形第一の體、莊嚴にあらざらずして莊嚴すと云ふ、是れ報身佛の相なり、圓教は、如來の智、深く罪福の相に達し、遍く十方を照し給ふ、微妙の淨法身、相を具し玉へること三十二なり、一々の相好即是れ實相なり、實相法界具足して減ずることなし、是れを法身佛の相となす、と説き示されてある

の對絶せり、無相の相にして有相の身なり」と説かれてある、佛院觀の眞意に契會せんと思ふ人々は、この聖語を審思せねばならぬ、この文は正しく絶對の全理想の上には、眼の所對を超越して色相の美を認め難きも、その絶對の全理想は直ちに個体の分理想に顯はるゝ故に、無相の相にして有相の身と説かれたのである、前文の相々實相の文と同意義の聖語であると思ふ元來佛敎の法身觀が紛亂して居るから、佛身の眞相が會得せられないと思ふ、法身觀は畢竟佛敎原理の方面に於て分岐せるより多岐の説を生じたるものであつて、小乘の眞空涅槃を實在とする者は、佛の法身を以てこの眞空なりとす、通教の眞空も少しく異なるのみで大体同様である、假觀を立つるものは、無形を第一の體として衆色像を影現とすることになる、中道に就いても、單中道説は、正しく空假の外に抽象的に中の理を實在として之を法身とするのである、不單中の中に、理圓と事圓とあつて、理圓の方は、三體圓融の理を法身とするのである、事圓に二つあつて、萬有の事

この四佛説は、美に就いての主義が分明に辨別されてあると思ふ、三藏教に生身佛の世間希有の相を見るは現實美であらう、通教は無相を相とすると云ふが、是れは理想美の抽象なるものであらう、別教の第一の體を無形として之を淨明鏡に譬へ、化現莊嚴の身を鏡に映ずる色像に譬へたるは、絶對理想は美の對象にあらざるを示し、個体理想に美を見るものなるが、未だ絶對そのまゝを個体中に縮現する接近の旨致を明さないのである、圓教の相々實相の説は、正しく絶對の全理想を個体の分理想に將ち來りて、微妙の淨法身、相を具する三十二と歌ひ、絶對の法身を具相の個体に於て見るを示して居る、こゝに至りてこそ眞と美は接近して、遂に一體に歸して居るので、即ち美學上に云ふ美の頂點を捉へたるものではあるまいか、之を法華經の開經には、法色身と稱し「示して丈六紫金の暉を爲し、方整照曜として甚だ明徹なり」と説かれてある、又「是の如き等の相三十二、八十種好見るべきに似たり、而かも實には相、非相の色なし、一切の有相、眼

相を取つて事々無碍を云ふものは、森羅の當相を即法身佛とする、之を素法身とも云ふ、然かるにこの三千萬有のそのまゝを法身とするは理談なりとして、更に三千に於て迷悟の人格實在あるを見て、理智悲圓滿の色身實在の佛院を事法身とする、之を莊嚴法身と云ふ、前文の淨法身と云ひ、法色身と云ふは、この義である、斯くの如くに空を法身とすると、假を取ると、單中を取ると、理圓を取ると、事圓の三千當相を取ると、微妙の淨法身を取るとの六個の區分を混亂しては、佛身觀は會得の出来るものではない、日蓮上人は、この十界事常論の上に、無始色身常住の佛を渴仰し給ふたのであつて、十法界抄には、無始色身常住の義と示し、開目抄には、應身報身の顯本と云ひ、持法華問答抄には「我即是父の柔順の御姿見上げるべきをも未だ見上らず、是れ誠に袂をくだし胸をこがす嘆きならざらんや、暮行く空の雲の色、有明方の月の光までも心を催す思ひなり」と渴仰の旨を宣へ給ふ

たのである、又上人が龍口の劍頸場裡に在りて、法弟
且越に宣し給へる「臭き頭を法華經に捧げて金色の如
來と成るは、砂を以て黄金に替ふるが如し、これほど
の悦びを笑へよかし」との梵音は、この大見地より出
てて美威の頂點にある熱烈なる信仰の表白でありま
す

この開顯の意義に由りて法華經を拜しますれば、法華
經は具象的理想美の光明を放てること、多くの聖語
によりて證明せらるゝのであります、彼の舍利弗が悔
恨の語に、今までは只空を證すれば足れりと思ふて居
つたが、是れ眞の滅度ではない「三十二相を具せば乃
ち是れ眞實の滅ならん」として具相の佛身を渴仰して居
る、之は化城品の文である、嚴王品には「佛身は希有
にして煥燦殊特なり、第一微妙の色を成就し給ふ」と
説き、結經には「此の經には十方の諸佛、色身滅せず
と説き給ふ」と示めされてある

斯くの如くに法華經と日蓮上人とによりて佛陀を拜す
れば、無始色身常住の人格實在の意義極めて分明であ
る

當躰義抄 (六)

齡八十四老比丘 坂本日桓 講義

△正直捨方便、但信法華經、唱南無妙法蓮華經、人
煩惱、業、苦、三道、法身、般若、解脱、三德、轉、三觀、三歸
即一心顯、其人居住之處常寂光土也、能居、所居、身
土、色心、俱轉、俱用、無作三身、本門壽量當躰、蓮華
佛者、日蓮弟子檀那等中事也、是即法華當躰、自在神
力所顯功能、敢不可疑之、不可疑之文、此の六
行の文は分て三つ、初め正直捨方便の下より去て常寂
光土と云ふ二行十五字の判は、所信の本門壽量の經
功を明し、二に能居の下より去て檀那等中事也と云
ふ文までの二行の文は、能信の行者の得益を明し、三
に是即と云ふより下の五句廿三字は、教誡して結釋す、
己上分文也、是より講義して聽せます、正直に權教の
邪法邪師の邪義を捨て、但だ實教の正法正師の正義た
る開顯顯本の法華經を信念し南無妙法蓮華經と口唱し
奉る人の、煩惱道の惡念は轉じて般若の報身如來と

つて、又吾人の感覺より來たる美的欲求の最高點に達
して具象的理想の妙を捉へ、而かも絶對を有限個體の
上に將ち來りて吾人の感覺の對象として渴仰の心を煥
發し、こゝに宗教の眞價を發揮し給ふて居るのであ
る

若し乾燥なる哲學的理論のみに流れて、十界事當の義
を明かすなく、又この妙相色身の佛陀の實在を光顯す
るなくば、佛教の信仰に眞の活力と光明を來らす
ことは、或は望みなかるべきかと思ふ
前來連べ來れる所に於て、一個の佛陀は、哲學面には
眞理の轉現者として健存し、宗教面には慈悲の濟度者
として活動し、倫理面には三德の大恩主としてその源
泉となり、文學面には審美の頂點に立ち淨法身(美の
神)として微妙相を示めして渴仰を煥發せしめ給ふこ
とが、大体分明せしこと、信じます

積首して妙種相に皈依し上る
積首して難思議に皈依し上る
南無釋迦牟尼佛 (完結)

顯れ、苦道の依身は轉じて事常住の法身如來と顯れ、
惡業道の繁縛は解脱し轉じて慈悲の應身如來と顯れ、
亦た無始本具の般若の妙智は無始本具の報身の妙境に
冥合し、無始本具の中觀の妙智は無始本具の法身の妙
境に冥合し、無始本具の假觀の妙智は無始本具の應身
の妙境に冥合し、斯の如く三觀の妙智が三歸の妙境に
冥合して即行者の一念の心中に顯れて、無作三身即一
の應身常住の一大圓佛と成るが故に、其人居住の娑婆
の穢土が轉じて常寂光の淨土と成るは、是則本門
壽量の經功で有ると判じたるので有ます、次に能居よ
り下の能信の人の得益の文を消釋せば、本門壽量能信
の能居の行者の身は、無作三身即一應身常住の一大圓
佛なれば、其人の所居の土は三災を離れ四劫を出てた
る常住の淨土と有る、偕て又た行者の色心の無始の本
覺の三身は、俱に轉となり、無始の始覺の三身は俱に
用となり、此の俱轉俱用無作三身本門壽量の當躰の蓮
華佛なる者は、日蓮が現在の弟子檀那並に滅後の本門
壽量三秘の妙法を信念口唱する行者の中の事にて、他

宗に於て決して有るべき者に非ず、又次に是即の下五句廿三字の文を講せば、是れ即ち妙法當歸の蓮華佛を證得したる理由は、日蓮が現在并に滅後の弟子檀那の心法の信念の自在と、色法の口唱の神力と、此の自在神力の顯す所の功能で有る、敢て之れを疑ふ可からず、之れを疑ふべからずと教誡して結したる妙判で有ます爰に於て或人問て曰く、自在神力の四字を色心の二法に約して消釋したるは自義か聖説か、日相答て曰く、極めて聖説なり、天台大師法華玄義の一の卷に於て、神力品の四句の要法の第二の句の如來一切自在神力の文を消釋して云く、内の用を名三自在外の用を名三神力即證用也と釋したり、内用とは心法の用也、外用とは色法の用也、是れ其説で有ます、偕て前々の講席に於て、妙樂の釋教の三千在理の文の下に於て、迹門所談の俱鉢俱用は講じて聽せましたが、本門所談の俱鉢俱用は當席にて講じます約束なれば、是より畧して辨じて聽せませす、さて此の俱鉢俱用の本據の經文は、申すまでもなく本門十妙の中の本神通妙の如來

秘密神通之力の二句八字が本據で有ます、如來秘密の一句四字が俱鉢の文、神通之力の一句四字が俱用の文で有ます、是れは此れ其本據を示しましたらみて、此の二句八字の文の講義は他日別席に於て講じて聽せませう、此の俱鉢俱用と申す法門には、自行に約して論ずる俱鉢俱用と、化他に約して論ずる俱鉢俱用と、此の二種が有ます、先づ自行に約して論ずる俱鉢俱用と申すは、無始の本覺の無作三身は、三身俱に鉢となり、無始の始覺の無作三身は、三身俱に用となるので有る、斯く申したのみでは初學の方には少し難解故、例を引いて辨じて聽せませす、無始の本覺の無作三身は三身俱に鉢となると申すは、本佛の釋尊が久遠五百塵點劫の往昔凡夫で在し時、先佛の教を蒙り本因妙の眞實の修行を遊ばし本果妙の眞實の證を得させ給ひたる時、我が此の身鉢なる者は、無始より本來開覺したる無作三身即一の應身事常住の一大圓佛なる者で有しと、我れと我が身の上の大根本の成立を證得したるを無始本覺無作三身の一大圓佛と云ふ、此の三身を俱鉢と申すて

有る、鉢と申すは寂然不動と申して、證得の功能の無き身鉢の方が鉢となるので有る、其處で無始の始覺の無作三身は俱に用と申すは、本佛の釋尊が久遠五百塵點劫の往昔本因本果實修實證して、無始己來の迷の煩惱業苦の三道が悟の法身般若解脱の三徳と轉じ、轉迷開悟したる時の我が身の上を、無始の始覺無作三身即一の應身事常住の一大圓佛と云ふ、此の三身が俱に用となるので有る、此の三身は開悟すべき功用が俱に有るから俱用と申すので有る、約言すれば同じ身鉢で所證の身鉢は俱鉢で、能證の身鉢は俱用と申すので有る依て始覺本覺一鉢不二と釋して有ます、さて今又一言辨じて聽せる事が有る、無始の本覺、無始の始覺と云ふ、無始の二字で有る、無始とは無窮の義、無終も又た無窮の義と申して、過去の無窮大古昔、未來の無窮將來と申すが無始無終と申すので有る、然れば本覺も無始よりの本覺で、又始覺も無始よりの始覺で有る、依て無始の本覺、無始の始覺と申すので有る、無始の本覺は文字上に於ては疑問はなけれども、無始

の始覺と申すには文字上に於て初學の方は疑問が有らうかと思ひます、始覺とは始て覺る事なれば、有始にて無始では有るまいと疑が發りませう、佛も衆生も無始より始覺べき資格を具して居るので有る、釋尊は五百塵點劫の往昔まで生死海に漂ふて始覺せずに過ぎ、我等は今日まで九界に漂泊し來りたる者で有る、今日始めて迷の夢が醒たので有る、依て始覺も無始より持つた始覺で有るから無始の始覺と申すて有ます、是れは之れ自行内證の俱鉢俱用の法門で有ます、化他に約する俱鉢俱用とは、最初の本果自證の實修實證の無作の三身は俱に本鉢で有る、第二番の成道己來世々番々示現したる三身は俱に途用で有る

問天台大師(中略本文下ニ△印)天台大師云々妙法華經の解を讀むに難し、釋尊の意、是、意、也、文

問天台大師と云ふより去て丁十五釋此意也と云ふ文に至るの卅行の文は、先は問、次に答へ、此の答の文に分て三段で、初の三句十三字は、譬喻の蓮華の釋の出所を示し、二に丁十三當歸蓮華釋と云ふ文より去て丁十四當

鉢蓮華也と云ふ文に至るの十六行十二字は、當妙判の正意に約して正しく當鉢の蓮華を判じ、三に丁ウ三周各各と云ふより去て丁ウ釋此意也と云ふ文に至る九行四字は、法華一部の始終に當鉢譬喩の二種の蓮華を具したる旨を判ず、已上分文也

△問天台大師釋三妙法蓮華當鉢譬喩、二義一給、爾ラ者其ノ當鉢譬喩ノ蓮華ノ縁如何 答譬喩蓮華、施開廢ノ三釋委、可レ見之、文此の三句十三字を消釋すれば、往昔天台大師が法華經の講義を遊ばしたる時、當鉢と譬喩と二種の蓮華の講をなされたと聞き及したが、二種の蓮華とは如何なる模様な者で有ると問れたるて有る、其處で答の文を消釋すれば、問者の申す二種の蓮華の中の譬喩の蓮華は、玄義の一の卷に、迹門の爲實施權の法門には爲蓮放華の譬を以て釋し、開權顯實の法門には華開蓮現の譬を以て釋し廢權立實の法門には華落蓮成の譬を以て釋し、本門の三譬も斯の通て有るから、玄義の一の卷を繕て委く之を見給へよと答へたる文て有る

る者で有ると釋したるのて有る

△又云、今蓮華之稱、非是假喩、乃是法華ノ法門、法華ノ法門ハ清淨ノ因果微妙ナリ、名此ノ法門ハ爲蓮華、即是法華ニ味ノ當鉢之名、非是譬喩也、文此の二行十字の釋を讀じ文すれば、今の經の本門壽量所顯の妙法蓮華の稱號は、是れ假名の譬喩の草の蓮華の名には非ず、乃ち是れ本門壽量所顯の十界互具、百界千如、眞の事の一念三千の法門の名て有る、此の法華所説の法門は上に辨明した通り、本有九界の蓮華も本有佛界の蓮華も、皆悉く無作三身即一の清淨なる應身如來にして、因の九界に佛界を具し果の佛界に九界を具したる其深微妙の法門を名けて妙法蓮華と爲したる者である、即是れ法華三昧の當鉢の名にして、假名の譬喩の蓮華の名にては非ざる也と釋したる文て有る

△又云、問、蓮華、定、是、法華三昧ノ蓮華ナリ、定、是、花草ノ蓮華ナリ、答、定、是、法ノ蓮華ナリ、法ノ蓮華ノ難、解、故、草花、爲、譬、利、根、即、名、解、理、不、假、譬、喩、但、作、法華之解、中下未レ悟須レ譬、乃、知、以、易

△當鉢蓮華ノ釋者、玄義ノ七ニ云、蓮華ハ非レ譬、當鉢得レ名、類、如、劫初ノ萬物ニ無レ名、聖人觀レ理、準則、作レ名、文此の一行十六字の文を消釋せば、此の引用の文も大師の内鑑と、宗祖の開顯の佛知見を以て引きたる文て有る、開迹顯本唯本一部の法華經本門壽量所顯の妙法蓮華の名は、譬喩の草蓮華の名にてはなく、十界の當鉢に妙法蓮華の名を附け得たる者で有る、其理由は無始本有の九界本因の蓮華に無始本有の佛界本果の蓮華を具足し、無始本有の佛界本果の蓮華に無始本有の九界本因の蓮華を具足してあるを當鉢得名と申すて有る、此の當鉢得名に就て類例を擧て申さば、成住壞空の四切の中の住切とて十界の衆生が住み初めたる時には、萬物に名と云ふ者が無い、其時に聖人が出現して物の道理を觀て其道理に準則して、天と名け地と名け、人と名けたる者で有る、此の十界の當鉢に妙法蓮華の名を附しも、聖人が九界の因の華に佛界の果の實を具し、佛界の果の實に九界の因の華を具足したる眞理を觀見して、十界の當鉢に妙法蓮華の名を附けた

解ノ之蓮華ハ法華之蓮華、故、有、三、周、說、法、一、返、上、中、下、根、一、約、上、根、二、是、法、名、約、中、下、一、是、譬、名、三、根、合、論、變、字、標、法、譬、之、如、此、之、解、者、與、誰、爲、譬、耶、云、文、此の五行十六字の文は分て二ツ、先は問、次へ答、此の答の文に分て三段、初の一句五字は定めて法鉢の蓮華なる事を決答し、二に法蓮華難解と云ふ文より去て双標法譬と云ふ文に至る四行四字は、譬喩の蓮華を用る理由を明し、三に如此の二句九字は結釋、已上分文也、此れより消釋します、問の文は顯著なれば申しません、答の中の初の一句五字の文は、所問の二種の蓮華の中に於ては、本佛の本意に約すれば決定として法鉢の蓮華で有ると答へたり、次ぎ法蓮華の下の四行を消釋せば、偕て法鉢の蓮華と申すは、十界互具、百界千如、事の一念に事の三千の諸法を具足したる事と説きたる法門なれば、容易難解者で有るが故に、世間に有り觸れたる草花の蓮華の花實同時に具足したるは、凡眼ても見易く凡智ても悟り易き者を用て、難解の法鉢の蓮華に譬へたる者で有る、然れども上根利智の舍利

佛の如きの人は、妙法蓮華の名を聞いて、即十界互具、百界千如、一念三千の諸法を具足したる道理を解りて譬喩を假りるには及ばず、但し妙法當轉の蓮華の解を作すけれども、中根下根の淺智の迦葉須菩提等の人に至ては、方便品の法轉の蓮華説にては未だ悟る事が出来ませんから、佛が譬喩の蓮華説を以て悟らせたいのである、乃ち知れ易解の草蓮華を以て難解の法蓮華に譬へたる者て有る、故に法華經透門には法説、譬説、因縁説の三周の説法が有て、上根、中根、下根の機に返したて有る、上根の舍利弗等の人の爲には是れ法轉の蓮華の名て有る、中根下根の人の爲には是れ譬喩の蓮華の名て有る、佛説已に斯の如くなれば、我れ今五重玄義の妙法を講義する故に、上中下三根に返する説法を一題に合して論じ、法説、譬説の二の蓮華を雙へて標して、妙法蓮華經と題號に掲げたる者て有る、此の如く題號を解釋すれば、單法にも陥らず、單譬に片寄らず、中道の解釋なれば誰と與に譯論を爲さん耶と釋したる文て有ます

△此ノ釋ノ意、至理無名、聖人觀理、萬物ニ付シテ名ヲ時、因果俱時ノ不思議ノ一法有リ、名之ヲ爲シ妙法蓮華ト、此ノ妙法蓮華一法ニ具シテ十界三千ノ諸法無ニ闕減、修ニ行ニ之ヲ者、佛因佛果同時ニ得之ヲ、聖人此ノ法ヲ爲シ師、修行ノ覺道ヲ妙因妙果俱時ニ取得シ給フ、故ニ成ニ妙覺果滿ノ如來ト給フ也文

是の此釋意と云ふ文より去て、如來給也の文に至る四行十六字の判は、分て兩段で、初の此釋意と云ふ文より、十四同時得之と云ふ文に至る三行、字は、所證の妙法當轉の蓮華を判じ、二に、十四聖人此法と云ふ文より去て如來給也と云ふ文に至る一行十字は、當轉蓮華の能證の佛を判じたる文て有ります、已上分文也、此れより消釋して釋せませす、上に引用したる天台大師の法華玄義の判釋の文の意は無始本有の法界實在の至極の妙理は、從來名相無き者て有る、然るに聖人觀に出現し給ひて物の妙理を觀て、上に覆ふ者を天と名づけ下に載する者を地と名づけ、中に住みて靈なる者を人と名づけて、濟度利生せんとする時に、因華果實と前

後なく同時に具足したる不可思議なる一法が有つた、其一法を妙法蓮華と名を付けたので有る、一法とは十法界の衆生の事て有る、此の衆生の當轉の名を妙法蓮華と申したて有る、其の理由は此の十法界の衆生の當轉に各々九界の因華と佛界の果實とを具足して三千の諸法を備へて毫も闕減なき者て有ると判じたる妙判也次に聖人此法の下の能證を人を判じた一行十字の文を消釋せば、向に辨じたる通り、此の妙法蓮華と名づけたる題目を信念口唱したる如説修行の行者は、佛の妙因妙果の因果の二法を同時に具足し、之れを證得したる者也と判じたる妙判也、此の判文の意は、觀心本尊抄に、釋尊の因行果徳の二法が妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持せば、自然に彼の功徳を譲り與ふと判じたる文と同一の意味て有ます、聖人久遠五百塵點劫の往昔、此の妙法蓮華を師として信念口唱し如説修行したる功徳に酬ひて、十界互具百界千如事の一念三千の佛道を開覺し、妙因妙果を俱時に感得し給ひたる故に、妙覺果滿の如來と成り給ふ者て有ると判

じたる文て有ます

△故ニ傳教大師ノ云々、一心ノ妙法蓮華ト者、因華果實俱時ニ增長、當轉ノ蓮華ト也文此の四句廿四字は出家大師の守護章の中卷の文を引證して、當轉の蓮華を明したるのて有ます、さて消釋しますれば、一心の妙法蓮華者は一念三千の妙法蓮華經と申す事て有る、此の一念三千の妙法蓮華經と申す法門は十界各々の一念に九界の佛因と佛界の果實と俱時に增長したるを、妙法當轉の蓮華佛と申すて有ると釋したるなり

△三周各各有當轉譬喩、總ニ一經皆當轉譬喩ト、別ニ有ニ七譬三平等十無上之法門、皆有當轉蓮華ト也、證ニ此ノ理教一名ニ妙法蓮華經ト也此の九句四十八字は法華一部には皆當轉譬喩の二蓮華有る事を示したる文て有る、已上分文也、此れより消釋します、三周とは法説、譬説、因縁説を三周に説きたる故三周と申しませす、方便品の法説周の中にも、如優曇鉢華、時一現耳と説きて譬説が有り、餘の二周も此れに例して知り給へ、故に各々有當轉譬喩ト釋したて有る、惣の蓮華

にも、一經の中に當鉢の蓮華と譬喩の二の蓮華が有り別々の七譬の下にも、當鉢蓮華が有る、七譬(子三聚、二窟頂上珠、五三注雨、六化)二平等(一乘平等、世間涅槃)四威七三子、已上七譬(三平等)平等法身平等、已上十無上(種子無上、二修行無上、三增長力無上、四三須彌無上、五三淨淨國土無上、六三說無上、七三教化衆生無上、八三成大菩提無上、九三涅槃無上、十三勝妙方便)譬喩品より去て此の當鉢の法門が有る也と釋したる文で有る△詮云、此の理教名ヲ爲ニ妙法蓮華經ト云此の文を消釋せば、理とは所詮の理なり、所謂當鉢譬喩の蓮華の理で有る、教とは能詮の經なり、所謂法華經廿八品は能詮の經で有る、此の能詮の經と所詮の理を名づけて妙法蓮華經と申すので有ると判じたる文なり、更に深易く云は妙法蓮華の四字は所詮の理也、經の一字は能詮の教で有る也

△妙樂大師云、須以七譬各對蓮華權實之義、乃至何者蓮華、只是爲實施權開權顯實、七譬皆然也、又此の釋は、釋籤の一の卷の文で有る、此の文を消釋すれば、譬喩の蓮華を爲實施權、開權顯實、廢權立實に譬へたる如くに、別譬の火宅等の七譬も、上の如く權實に對當して釋すべきで有る、乃至と文を

越超して、何者は譬喩の蓮華は只是れ爲蓮故華を以て爲實施權に譬へ、華開蓮現を開權顯實に譬へたれば、別譬の火宅等も一々爲實施權等に譬へべき者で有ると釋したるなり

△又初初有花草、聖人見之理、號名蓮華、此花草因果俱時、似妙法蓮華、故此花草名蓮華也、水中生蓮華、赤蓮華白蓮華是也、譬喩蓮華者、此花草蓮華是也、以此花草顯難解之妙法蓮華、天台大師云、妙法難解、假譬易顯、釋云、是ノ意也、又此の又初初と云ふ文より去ての五行の文は、譬喩の蓮華を建立したる事を判じたる有る、此の文分て二ツ、先は判じ、次に天台の下は引て結す、又初の判する文に又二ツ、初の三行二字は花草を蓮華を名を付たる理由を判じ、二に以此の下二句十二字は正しく譬喩の蓮華を建立したる所以を明す、次に結釋の文に又分て二ツ、初は引き、三に釋是意也の一句は結す、已上分文也、此より消釋します、又初切の中の住切の初めに一種妙なる草花が有つた、聖人が此の

草花の成立したる有様を御覽あり蓮華と名を付けました、其所以は此の草花を見るに、花の因と果の實と前後なく俱時に成立たる有様は、妙法蓮華に宛も似たりとして、此の草花を蓮華と名を付けたるのて有る、水中に生ずる今時の赤蓮華、青蓮華が是れて有る、今の法華の題號の譬喩の蓮華と云ふは是て有る、此の蓮華の華果同時に成立たる有様は肉眼を以て見ても易難く、此の草花の蓮華を以て難解の妙法蓮華に譬喩れば、其理由が顯れる故に、譬を取つた者で有ると判じ、次に結釋の文を講せば天台大師が法華玄義の七の卷に、當鉢の蓮華は難解の者で有る、依て譬喩の蓮華の成立を假りて教めれば、當鉢の蓮華の成立が顯れ易いから、譬喩の蓮華を本佛の釋尊が説き給ひたるで有ると釋したるは、此の意味で有ると結釋したる判文で有る

久遠の本佛 (自我偈講話の三)

自我得佛來 所經諸劫數 無量百千

萬億載阿僧祇

訓 讀
我れ佛を得てよりこのかた、經たる所の諸の劫數、無量百千萬、億載阿僧祇なり

(大意)

此の四句二十字の文は、自我偈總體の眼目でありまして、即ち、自我偈五百十字の全文は、此の四句の文を敷衍したものと言ふべきであります、

此の文の大意とする所は、大聖釋迦牟尼世尊は、今月初めて世に出現して、新に佛に成つたと言ふ様な、淺薄な一世一代の佛陀ではない、實に始めなき久遠の太古に於て、佛果を得てより、數限り無き久しい歲月を経て居つて、常住にして滅せざる眞壽命と、自在にして窮り無き神通力とを以て、今猶、此世界に在して我等一切衆生を救済たまふ所の「法界の唯一教主、久遠の本佛」なることを説き顯はしたのであります、

(解釋)

「我れ佛を得てよりこのかた」とは、此の中で、「我れ」とは、釋迦牟尼佛が、躬ら御自身を指して「我れ」と仰せられたのであります。

「佛を得て」とは、正覺を開いて佛陀に成ること此の佛を得るといふは、成佛といふことと同じであります、此の「得る」と云ふ文字は、決して軽々しい文字ではありません、此の下の文にも「久しく業を修して得る所なり」とありまして、佛を得るといふものは、唯徒らに遊び戯れながら得たものではない、久しい間一生懸命に苦を積み徳を累ねて修行をした結果であるといふのです、而して此の「得る」と云ふ文字の裡には釋尊の覺体に一切の善行、一切の善徳を悉く具へて居るといふことを含んで居るのであります。

「佛を得てより」と言へば、無始の古佛たる釋尊に佛に成つた始めが有る様に思はれますが、元來、釋尊の本体は、無始無終と申して始も無く終りもなく、常住不滅と申して、易らぬ亡くならぬものであります、然るに成佛に初めがある様に説いてゐるのは、有始に

に、かの微細い芥子粒を入れ、壽命の長い天人が三年に一度づゝ來て、其の芥子を一粒づゝ取り去つて行く斯様にして、終には其の芥子粒を悉く取り盡した時を一切といはします、それから磐石劫とは、これも壽命の長い天人が、羽衣といふて薄い蟬の羽の様な衣を着て、其の衣の裾で、大きな磐石の上を三年に一度づゝ觸る、而して此の磐石が磨り耗らされて滅つた時を一切と申します、これらは、譬喩を以て一切とは幾何位久しいものであるかと云ふを示したのであるが、然し劫といふことは、千年だが萬年だか數の知れない程の歲月を宛に角一期として顯はしたものであります、斯様な長い歲月をば、一劫一劫と其數を重ねるから、乃て「諸の劫數」といふて、劫の數の多いことを顯はしました。

「無量百千萬億載阿僧祇なり」とは、直ぐ上の文へ續けたので、釋迦牟尼佛が、佛果に成つてから「經たる所の諸の劫の數は、幾何程だ」と云へば、實に計り知ることが出来ないといふので「無量」と説いたのであ

即して無始を顯はすの意で、即ち始めある様に説き出して始めなきを悟らしめ、實に釋尊は絶待無限の妙體なることを知らしめるのであります。

所詮「我れ佛を得てよりこのかた」の一句は、釋尊が「我れ佛に成つてから」と仰せられた御語であります。

「經たる所の諸の劫數」とは、此の文より下は、釋尊が、佛を得てから、何程位久しいかと云ふことを説いたのであります。

「經たる」とは、歲月の經つことを言ふのです。

「劫」とは、梵語で、此土の語に翻譯して見ると「長時」といふことになり、長時とは、「長き時」と申すので、それならば、何の位の長い間を一切といふかといへば、これは算盤を弾いて、幾年幾月と云ふ様に、確然と定める譯には参りませんが、種々の經文の中には、凡そ幾何位といふことが、譬喩を以て書いてあります、ソレは此の「劫」に就いて、芥子劫、磐石劫などといふことがある、芥子劫とは、四十里四方の城の中

りです。

「無量」とは、量ること無しと讀んで、幾何の數だか量り知ることが出来ないといふことであります、然し無量だ量り切れないと云ふた丈では、物足らぬ、何んとなんか感じが深くない、早く云ふて見ると、昔の谷風といふ力士は、非常に力量が強かつたと云ふ場合に唯だ強かつたと云ふた丈では、ドウも強いと云ふ感じが薄い、ソレで少し言辭を増して、谷風は、大層に力があつた、吾々が五人や十人て對みて行つても彼れの力量には敵はない、ソレどころか五六十人の力を併せても敵はなかつた……と斯ふ言へば非常に強かつた様に思へる、これと同様で、今の無量といふことを、猶一層強く悟らせる爲めに「無量」の下へ「百千萬」と附けました、更に亦附け加へて、成佛してより經たる所の諸の劫の數は、百千萬どころでは無い、今一層多くの數だと云ふので「億載阿僧祇なり」と申したので、す。「億」とは、昔より十萬を億とするのと、百萬を億とするのと、萬萬を億とするのと、三つありますが、

現今では、萬萬を億とするのが、通例になつて居ります、

『載』とは、億から兆といふ數になり、兆から京、それから垓、桮、溝、澗、正、この次が、載といふ數になります、載となれば、最早、數の極度で、或る書物には、載といふ數は、大地も載せることが出来ないとあります、

『阿僧祇』とは、天竺の語で、此土の語に翻譯せば『阿』は「無」といふこと、『僧祇』は、「數」といふことになりまして、即ち阿僧祇で、「無數」といふのです、『無數』とは幾何だか數が分らない、數へ盡されないと云ふ意味です、即ち、無量百千萬億載といふ澤山な數でも未だ足らない、阿僧祇とて無數である、殆んど何人でも數へ盡されないものであるといふです、斯くも言辭を以て、言ひ顯はし得る限りの數の極度を示めされたのは、久遠本佛の壽命の無限無窮を示めして、一代佛敎の中の最も第一の敎説たることを表はしたのであります、

を、少しく御話し致しませう、

釋尊顯本の意義

釋尊が自ら『我れは久遠の本佛』であるといふことを顯はしましたのは、我等衆生の迷つた顛倒な眼より見たる釋尊に對して、如實知見眼を以て釋尊御自身より見たる本佛釋尊を示されたので、即ち衆生の憶想妄見を破つて佛陀の正知正見を示されたのであります、凡そ之れに二個の意義がある、第一には常識を以て、見たる釋尊に對して超常識の意義があることを示めすのであります、

常識より見たる釋尊とは、微妙廣大なる本佛としての佛世尊ではなくして、人間世界に於て最も偉磊御方としての佛世尊であります、地球上に於て何人も肩を並べるものなき英雄豪傑としての釋尊であります、

これより、此の常識の上から觀たる釋尊とは、如何なる人格の御方なるか、又吾々人類に如何なる敎訓を與へて居るかといふことを少しく窺ひませう、釋尊は、天竺の淨飯王の御子、悉達太子として生れ

(文相)

これ迄で、自我得佛來等の四句二十字の文を大略解き了つたと思ひますが、今一應、此の文相を講し致しますれば、

釋迦牟尼佛は、天竺の淨飯王の太子と生れ、御年三十にして、正覺を成らいたと云ふ様な、新しい佛陀では無い、實に、本佛釋尊は、佛果を得てより、經たる所の長さ歲月の數は、量り知ることの出来ない百千萬億載にも超へたる、數限りなき時間である』と申すのであります、事實上、現り限り無き大慈大悲を以て説法して御座る所の生身の釋尊が、即是、久遠劫の太古より、暫時の休止も無く、我等一切衆生を救済たまふ所作佛事をば、盡十方世界に爲し續けて居るところの、有り難さ、尊さ——久遠實成の本佛——なることを示めされたので、之を『釋尊の顯本』と申します、

(要義)

是れより、此の經文に含まれて居る、重要な敎義

た、一天萬衆の御位を儲ぐべき第二の天子様として生れた、是れ實に此の世に生れ出でたる運命の上にて先づ何人よりも超れて居ると申さねばなりません、此點に於ては、釋尊と共に世界の三聖人と呼れて居る所の大工の伴たる耶蘇基督や、卑賤の官吏の子たる孔子などよりも、先天的に運命に於て勝つて居ると申さねばならぬ、釋尊は當時に於て其の敎説その德行をば暫らく別としても、先此の運命の點に於て、何人よりも勝れて、印度の四民の尊敬を受けたに相違ない、又是れが爲めに、敎説を傳弘る上に於て非常なる便利があつたものと思ひます、されば之を本佛秘密の應用と云ふ上から見たならば、非常に深い意味があるに相違ないと思ひます、

釋尊の降誕する時に當りましては、藍毗尼の園に、百花は爛漫として一時に咲き亂れ、天よりは甘露の雨を灑ぎ、身よりは光を放ち、天上天下唯我獨尊の叫聲を揚げ、阿私陀仙人は來つて、熟々と其の人相の凡常ならぬを見て、此兒轉輪聖王とならなければ必ず一切種

智を成くの人となるべしと言ふたと云ふことである、是等の事は、世間の學者に言はせたら、宗教上の奇蹟と言ふてせう、當時の印度國民の上下の歡喜と夢想とを歌ふた詩人の形容語といふてせう、さりながら此の中に於て、釋尊は生れながら其の容貌風采が何人よりも勝れて居つて、見る者をして尊敬の念を起さしめた事は、深く信ぜねばなるまいと思ふ、容顏甚だ奇妙にして光明十方を照らす(法華經)と云ふ如な圓滿な相好は何處となく備へて居つたことは深く思はねばなりませぬ、

悉達太子たる釋尊は、苦痛や煩悶を以て滿ちて居る人間世界の状態を見て、此の苦惱の根本を除き去らなければならぬと云ふので、御歳十九の時、古往今來何人も及び難き大決心の下に、重思ある父君、最愛の妃、恩愛深き我子、富貴、名譽、金殿玉樓の中に容顏花の如き三千の宮女に取りまかれて有ゆる娛樂快樂を恣にするべき御身分等一切をば、弊履を捨てるが如くに振り捨て、奮然出家して丁いたしました、

求むれば必ず得られる尋ねれば必ず見出せる進めば必ず到れること、而して又吾等は如此な能力を生れながら持つて居ること等を

明かに証明して下さつた、

成道已後の釋尊は、悲観を解脱えて法悦の中に住するの人となつた、而して亦此の法喜を世界に傳へんとするの人となつた、轉輪聖王と爲つて四海を一統すべき悉達太子は、今や大覺法王となつて世界幾億萬の人の心靈を統御し救ふべき御方となつた、それより五十年の間、一日片時の休みも無く衆生濟度の爲めに全身を捧げ、疲勞を露はさず梅意の色を示さず、華嚴、阿含、方等、般若、法華等の諸教諸説を説いて大慈大悲の福音を以て、父君を初め御一族は申すもをろか、波斯悉王頻婆娑羅王の如な國王様も、耆闍摩羅の如き大盜賊も、舍利弗の如な智者も、周梨樂特の如な愚人も、四方も理髮師も、長者も貧者も、皆悉く慈悲深き佛徳の中に攝取て救済た、法華經の中に「等しく法雨を降して而も懈倦なし」とは、真に釋尊一代の化導を

實に釋尊の出家は、放逸にして五欲の荏に迷ふて居る吾等に對して

- (一) 眞理の自覺なき生活、實道の上に安住する生活は皆虚偽の生活であること、
- (二) 富貴とか名譽とか云ふ様な世間の有ゆる榮華は、眞實の依止處ではない、終極の依止處は其以上にあること、

- (三) 道の大切なること法の尊重きこと、
- (四) 大なる發心を以て熱烈に至心に法を求め道を尋ね

べること、

等の手強き勵しき亦有り難き教訓をば、身を以て示めし下されたものである、

六年の苦行を經、菩提樹の下の座し「天より劍の雨が降つて我五體を寸斷に切り碎くとも、煩惱生死の海を渡つて大覺の岸に到らざば、此處を去らぬ」と堅く誓つた釋尊は、内界と外界との惡魔を悉く降伏し了り、遂に臘月八日明星の出づる時、廓然と大覺を成いた、成道つた、而して事實上、

一言にして盡したものであります、(本章未完)

日蓮上人に關する疑問

に答ふ

本立院 日誓

左の一節は、予が親友軍人某が日蓮上人に關する疑問を質し、予之に答へたる者にして、別に多しき論議には非らず、然れども世の多くは、此の軍人と同様の誤を揮ひものなきを保せず、故に變心の笑を受くるあるも、之を顧みず、記すとこなりぬ、諸君之を諒せよ、

某曰 日蓮上人の事蹟を案するに、大難四ヶ度小難數知れず、或は房州小松原に於て眉間に傷を受け、或は松葉ヶ谷の燒打、或は伊豆の伊東ヶ浦に流され或は體の口の首の座に据へられ、或は佐渡四ヶ年雪中の生活、其の他人生の堪ゆべからざる迫害に遭遇し、或は利欲を以て之に擬し、或は名譽を以て之を誘はんとせしも、徹頭徹尾之を排斥し、終始一貫自己の主張を枉げられざりしは、其の意志の鞏固なる驚くの外なし、日蓮上人は如何にして斯くの如く豪壯なりしか、予等常人の其の真相を知るに苦しむ處なり

予曰 日蓮上人を以て單に意志の鞏固なりし人とのみ見るは、未だ日蓮上人を解したりと云ふを得ず、上人

の終始一貫せられたるは、上人の精神の奥底に、權威ある命令者あり、而して上人は其の命令を宣傳すべき一大任務を自覺せられしを以てなり、貴君は軍人なり請ふ試みに戰爭に就て反問せん、日露戰役に際し軍人が深く敵地に臨み彈丸硝雨の間に馳驅せし時に、或は肉彈と化して突入し、平然として死を顧みざるものあり、或は軍事探偵として遂に敵の捕虜となり銃刑に處せらるゝも毫も哀しまざるが如きものあり、之等は普通常人の心を以て之を見れば、其の精神狀態に於て實に解釋し能はざる様に覺ゆ

某曰 軍人の戰地へ向ふにあたりては、自己の腦底唯 陛下あるのみ、陛下の御詔勅を遵奉し、終始一貫自己の任務を盡さんとするにあり、自己の生死の如きは固より度外視し更に問題となりおらざるなり予曰 善哉々々 日蓮上人も亦殆んど之に類似す、上人は佛陀の教勅を奉じて此の人世に降誕し、惡魔の強敵と奮闘すべき一大任務を自覺し給へり、故に名利固より念頭になく、迫害亦何の恐る處なし、上人の精神唯佛陀あるのみ、佛陀の使命を果すにあるのみ

某曰 陛下は現に宮中に御座しまし、時に拜謁を賜はるとあり、然るに佛陀は印度に降誕し給へるも、

既に涅槃の儀式を示さる、處を隔て時を異にせる佛陀が、日蓮上人に對し教勅を賜はると云ふとは、事實あり得べからざるなり、然るを 陛下と軍人との關係を以て、佛陀と日蓮上人との因縁を解釋するが如きは信伏すると能はず

予曰 佛陀既に涅槃に入り空寂に歸し、經文の紙上に其の名を存するも、實在せるものに非らずと思ふは、未だ佛教を見ざるの罪に座す、假へ經文を讀むも佛出世の本懐たる法華經如來壽量品を見ざるの致す處なり一切經中に壽量品なくんば、天に日月なく、山河に玉なく、國に王なく、人に神なきが如く、一代佛教の死活は實に壽量品の存否によりて決す、慎て壽量品を拜すれば、印度降誕の佛陀は、即久遠實成の本佛なり、世人多く悉多太子が難行苦行の結果、大悟成道すると謂へるも其の實は然らず、久遠無始の始よりして常住なると顯本し、慈悲廣大なる活動として吾人人類を救濟せんが爲めに人世に隨應して、肉身を以て應現したることを宣示し給へり、故に肉身の佛陀其の儘が實在の本佛なることを信するを得、されば佛陀は暫く涅槃を示さるると雖ども、本體應用は常住不滅なり、經文に方便、現涅槃而不實滅度一を説く是なり、譬は佛の降

誕し給ふは、猶ほ太陽の東山より出づるが如く、佛の滅し給ふは太陽の西海に没するが如し、而かも實には太陽は中空に懸りて動かざるもの、地球の自轉によりて太陽は出没すと思ふが如く、佛陀惠日の慈光は常住なるも、吾人の機根により佛に生滅ありと觀するに外ならず、今日の大陽は既往百千萬年を照らしたるの太陽にして、今日の大陽を除いて別に昨日の太陽ありしに非らず、又將來幾千萬年を照らす太陽も今日の大陽に外ならず、佛陀も亦然り、印度出現の釋迦文は、過去の衆生を濟度し又未來永劫の群生を救護し給ふとを推知し得らるべし、又例せば 今上陛下は皇統連綿の陛下にして、即 今上陛下の身心は歷代天皇の御徳を一切包容し給ひ、又今後の皇子皇孫と化して御即位あらせらるゝの御徳をも備へ給ふ、されば 今上陛下を中心として 天皇の神聖なる御徳、天皇不死の權威をも窺知するを得ん、今この肉心の連綿を一轉して神靈界に持ち來り、今の釋迦牟尼佛の常住不滅なるを領會すべし 陛下に近侍供奉せる高位の人は 陛下の尊容慈恩を拜し、又山間僻地に居住するものは御詔勅の發せらるゝを見て、其の宮中に御座すを知り、又愚鈍無智赤子の如きは何事をも辨へざるを以て 陛下の存

在を知らざるも、而かも其の恩徳を蒙るが如く、同居の淨土即眞の靈山事の寂光土に往詣せる衆生は本佛の尊容慈顔に接し、又壽量品の教勅を拜する者は壽量品を通ふして本佛の實在を領會し、壽量品を拜せざる無知愚鈍の者は本佛の實在を知らざるも、而かも本佛の慈悲止息するなきなり、此等の譬論及び類例によりて本佛の實在を信知すべし

某曰 佛陀の實在なるとは之を領するを得たり、而かも此の本佛が日蓮上人に對し教勅を下し給ふとは、何を以て知るとを得るや

予曰 佛陀が常住不滅の大活動あるを顯本せらるる必要上、本化上行等の大菩薩を召出し給へり、此の大菩薩は今日初めて佛陀が教化し給へるに非らず、久遠劫來の佛弟子たることを宣示し給ひ、これに對して一會の大衆疑問を生じ、その疑問を解決せんとして始めて佛陀自身の久遠實成を説き顯はし給ひ、更に一轉して末法今時の人類を救濟せんが爲に神力品に於て如來十種の神力を現じて妙法蓮華經の五字をこの大菩薩に結要付屬せられたり、而してこの大菩薩が本佛の敕命を奉じて末法に出現し、妙法蓮華經を宣傳するにあたりてや即ち三類の強敵競ひ起りあらゆる迫害等を加ふべき

を豫言し、又この菩薩が使命を果たす状態を評して如日月光明能除諸幽冥、斯人行世間能滅衆生闇と説き給へり、而して日蓮上人は末法の時に生れて壽量顯本の妙義を解し、上行菩薩の遭遇せらるべき一切の豫言を實踐せられたり、上人は實に法華經豫言の体现者なり、色讀法華の權化なり、日蓮上人なかりせば法華經の金言虛妄とならん、法華經虛妄となるならば一切經は反古同然となり何等の價值をも有せざるに至らん、されば日蓮上人あつて始めて本佛の實在を信じ本佛教濟の利益を蒙るとを得るなり、上人一世の活動は實に斯の實在の本佛より命ぜられたる大使命を果し給へるものなるを領會すべきなり

某曰 佛陀の三世了達なるとは到底凡人の企て及ぶべきに非らず、特に上行再誕に對する豫言及び日蓮上人が法華經の体现者なる所以唯但驚愕の外なし、面かも尙領せざるものあり、日蓮上人は如何なる使命を帯び、如何なる者と闘はんとし給ひしか、徒らに諸宗を慢罵せられたるやの感なき能はず

予曰 本佛と吾人とは元來父子の關係を有す、父なる本佛既に常住不滅にして自在無礙なり、清淨無垢にして娛樂快樂し給ふ、深く真理の本源に体達して慈悲限

を宣示する之れなり、一を隨他意と云ふ、衆生の意義に隨ひ父子の因縁を説かざるもの之れなり、面かも隨他意は隨自意の前方便にして之れに満足するを許さず然るに衆生無始の無明の爲に蔽はれて之れに著し、尙且つ之を弘布するに至りては徹頭徹尾打撃せざるを得ず、抑も一切の佛教は法華壽量品を待て始めて各其の任務を盡くすことを得るも、若し壽量品を離れて單獨行動を取らば即ち精神なき佛教にして却て有害無益となるなり、例へば一切の將卒は 陛下の統率の下に活動して等しく皆忠君愛國の士たるべきも、若しその統率を離れて各自任意の行動を取り、若しくは敵の指揮の下に活動するものあらば、之れ當に反逆となるが如く壽量本佛の教勸に基き一切の佛教を使用せば、悉く本佛の徳を貢獻するに至るも、其の持經者が任意の行動を取り却て本佛に反抗する反逆的態度を取るに至つては、人法共に折伏せざるべからざるに至るなり、之を要するに元品の無明は吾人一切の煩惱の根源にして佛子たるを知らしめず、隨て生死流轉の身となり一切の苦惱を受く、然るに本佛常住の悲願止むときなく、吾人を救済せんが爲めに上行等の菩薩に妙法五字を流布すべきを命じ給ふ、吾等此の五字を受持すれば三寶

りなく慈善根力功德力あり、然らば子たる吾人も亦然らざるを得ず、然るに事實は之に反し、無常遷滅にして憂悲苦惱多く、實に哀むべきの状態に非らずや、此れ果して何に起因するか、父子の因縁を中斷せんとするの惡魔あり、名けて元品の無明と云ふ、此の根本の惡魔を退治せんが爲めに日蓮上人は出現し給ひしなり此の惡魔は幾多の將卒を有し、父子の因縁を解せざる同胞兄弟の心中に入り、因て以て本化日蓮の使命を妨害せんとするなり、念佛禪律真言等の僧俗も皆本佛の愛子なるも、面かも其の父を忘れ不幸の大罪を犯すのみならず、佛子たる同胞を誑惑せんとす、彼等は悉く本佛の愛子たるにも拘はらず、惡鬼入其身して遂に元品無明の將卒と化しせり、日蓮上人は即ち大慈悲を以て彼等を懲れみ、茲に折伏の立行起り勇猛なる活動となれる所以なり

某曰 一切の佛教皆佛陀の説なり、隨て諸宗所依の經典又佛説なり、佛陀之を宣説し而して之を無明の將卒となす、甚だ謂れなきに似たり、其の理由を聞かん

予曰 佛説に二あり、一を隨自意と云ふ、本佛自己の本意を赤裸々に説くの説にして、即ち本佛の愛子たるの利益虚しからず、生死の長夜を照らし元品の無明を切るとを得るなり

某曰 人生れて死せざるものなし、而るに常住不滅の徳を得ると云ふ、其の利益未だ明かならず、如何予曰 印度降誕の悉多太子が發心せられたる動機は如何、曰く、人世の榮華を極むるも遂に老病死苦を免るゝ能はず、人世畢竟醒生夢死のみ、何を以てか生死流轉より解脱するとを得んと、難行苦行の結果豁然大悟し常住の境界と一致せられたるに非らずや、更らに壽量品によれば、常住不死の本佛が其の儘肉身の佛陀として出現せられたるに非らずや、吾人生死の本体に於て常住不滅の徳を具す、この常住の徳が妙法五字を受持するに於て始めて活動を起して本佛の眞の愛子となるこの眞の愛子と云はるゝ内容は、本佛の果徳と差違あるとなし、彼の降誕の佛陀が其の儘事常住の本佛なることを顯本し給ひしに類例して推知すべし、この常住の利益は現身に於て確定するも、其の體徳を顯はすは靈山往詣を待たざるべからず、分段(肉身)の身を捨てずしても即身成佛と云ふを妨げず、何となれば吾人の本体其の儘顯本するに至るを以てなり、然るに世人此の理を辨へず、分段の身を捨つるを以て即身成佛に非ら

ずと思ふは寔に淺薄の見解のみ、而かも受持妙法の當
 鉢を以て直に本佛と同様に心得、慥慢に墮するが如き
 は過されるの甚だしきものなり、現身に於て佛子たる
 とを自覺し(本因本果不二の本因)未來に於て佛陀とな
 るとを期せざるべからず(本因本果不二の本果)
 南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛、大慈大悲の本願力
 我等が信念を助け本因妙の位に安住なさしめ給へ、願
 くば此の功德を以て隨終を期して靈山に往詣し、速か
 に佛身を成就なさしめ給へ、南無妙法蓮華經

華道常林寺日寬師

(顯本注華宗の體)

俗に淺草遠洲流の祖。本松齊一得

松尾忍水

鰐鰯は鬻流のものにあらず、獅虎は孤島に住らず、
 是れ親易き道理也。而して本因坊第一世は本宗寂光寺
 の僧にして彼は甚だ方圓の技に於て大なるものなりき
 彼は斯道の鰐鰯なりき。鰐鰯を有する本宗の領域なる
 もの、決して小溪小谷にあらざることを知るに足る可
 し。而して爰に亦全く本宗に、常林寺なるあり、東
 京下谷に所在す、その第十一世に義運院日寬上人あり

小堀遠洲の正系信松齊一蝶の直門に入り、其技其術良
 く道奥を極め巖然頭角を現はし、遂に其流中興の大家
 と仰がる。是れ華道に於ての獅虎なりき、獅虎を有す
 る本宗の領域なるもの亦決して小島小國に非ざるを知
 るに足らむ。

宗義上に於て吾高祖日蓮大師の巨大を有する、什祖
 の巨大を有する不惜身命日經の大なるを有する本宗は
 其領域は甚濶大なるを知りて、其副産物上に得るとこ
 ろの各面の傑物龍象も亦從つて巨大なるものを得べき
 を信じて可也。是れ大河に大魚住し、大海に鯨鰐泳
 ぐの理にして必然的結果なればなり。本宗の僧俗の期
 すべきは、常に法義上に於て無上冠を誇るに足るべき
 信地に到達することを悦びとするに止めずして、更に
 進んで政治上に於ても、哲學上に於ても、文學上に於
 ても、乃至科學上に於ても、聲調界に於ても、發明界
 に於ても、藝術界に於ても、富有の上に於ても、腕力
 の上に於ても、凡そありとあらゆるものの上に立つて
 最尊至上の高歩を爲すことを期せざる可らず。彼の本
 因坊の如き方圓界の泰斗の出でしは偶々本宗の領域濶
 大地味豊饒なるを證せしものなれば、之を宗義外のも
 のと見て闕却することなく、本宗宗海の副産物として

賀すべく、日寬の華道妙絶の地に到りしも要するに本
 宗教義の深遠が即ちそれに同化應響して斯に至りしも
 のと見、之等先例の模範となし、後進子弟は各面に
 勇猛突進して可なるべし。予は後進勇卒の人の爲めに
 少しく華道妙絶の大宗我日寬師のことを述べんとす。
 日寬上人は享保二年に生る(二説あり)、立花一世の名
 人京都池坊三十七世專好の死するに先つこと實に十
 八年也。上人常林寺に住す、齡耳順の頃深く感ずると
 ころあり、瓶花の技を遠州流信松齊一蝶に學ぶ。技大
 成して遠州信の中興と稱せられ、其住居淺草附近なる
 の故に人呼んで淺草遠州の祖と稱す。

華號を本松齊一得と稱し悠々自適百四歳(百八歳の説あり)

にて遷化す、時に文政三年正月朔日也。上人の門末
 林の如くにして妙技を有するもの少からず、二世一
 得(佐藤雲平)、萬松齊一曲(吉田徳左衛門、隱居して
 拈華齊咲眼一笑と號す)、寬松齊一典(初め二世一得の
 門なりしも後に初世の直門となる、服部氏なり)松養
 齊一伯(工藤氏、本松齊の號を稱し二世となり、一甫
 派本松齊流の祖となる)春秋軒一葉(横山氏、後に月
 花園和翁、軒号遠州の祖にして日寬一得の二世と稱す)
 等皆一世の名人にして又此等の門葉漸次子繁孫茂し

て今や全國に普ぬし。花の本、櫻遠州、河原邊流、村
 雲流、橘遠州等皆日寬一得の原泉より流出するところ
 也。向島みめぐり神社には門弟恩碑を建つ(石摺常林
 寺に藏す)日寬上人の妙技尋常ならざりしを知るに足
 らん。殊に遠州の正系に三傑を立て、祖小堀遠江守政
 一を除きて、春草庵一枝(俗に日本橋遠州の祖)、貞松
 齊一馬(正風遠州の祖)の二人と本松齊一得とは即ち
 それ也。日寬上人は一面は遠州流の中興三傑の一人と
 稱せられ、一面は別に一流の流祖として尊度せらる名
 譽と云ふべし。

しかし以上は只表面に顯れたる一通りの口上也。日
 寬一得の心理に立ち入つて之を窺へば實に吾曹本宗の
 空氣を呼吸せるもの、實に愉快堪へざるものある也
 請ふ吾曹をして少しく之を語らしめよ。

抑々瓶花に二系あり、一は池の坊の「立花」なり、
 二は護命の「生花」なり。何れも高祖は聖德太子に出
 たりと云ふ。而して池の坊の祖專務(小野妹子入道し
 て專務と稱し、京都六角堂内池の坊に住す)が時は聖
 德太子の花傳ありと云ふも未だ立花の鉢を爲さず、十
 二代專慶(天徳三年に生る)に至つて小規を成し、二
 十六世專順(應永廿五年生)に至つて規矩確立する也

是より先、専らより時代寛に隔り弘仁嵯峨天皇時代の頃南都の護命僧正佛法の理を應用して生花の形容を作る、後梅尾の僧明惠上人護命の風を慕うて更に規矩を整理して生花の道を啓らく、之より華道と稱す、池の坊專順明惠に後れて立華、砂物、生花の三規を立つ。而して斯間の消息を窺ふに池の坊に於ては只佛前に供すべし所謂「立花」の技のみ傳へたりし所、護命の出来るありて生花の理大に開闢せらるゝものあり、即ち外界の壓迫に會うて專ら苦慮の結果小卷傳を著したる歟。後名僧明惠上人護命僧正の四体を補ふて陰陽五体を整へ眞行草を應用して生花を完成せんと力むるに會して池の坊の立花系統は大に狼狽したるもの如し。後專順始めて「立華」と「生花」とを區分したるもの立花の振はずして生花の昌隆するに對する一策と知られたり故に今日の華道なるものは佛前供花として單純なる「立花」池の坊派と、插花の總てに佛教の教理法談を應用して佛教信念の一助としたる「生花」明惠一派との二系統に基く。一を池の坊流と名け、一を古流と名く、故に餘流は此二流より出ざるものはあらず。而して古流は華道と稱するの特權は獨り古流にありと誇る。池の坊は華道の家元なりと誇る、兩々相峙して今日に至

道に對する證見超凡なりしところを紹介せん哉。

(29) 初め華道も云はゞ無意味なる只通常清酒なる娛樂に過ぎざりしなるべく、今日尙華道と稱ふるものあるに見ても其時代の餘風を察するに足る可し。然るに時代の轉化と共に漸次理想の意匠と美術の工夫とは一般に花形なるものをも案出せしめ、遂に華道と稱するに至つて賓客を饗し、神佛に供するに唯一の禮義奉事となりたるが如し。故に今の華道と云ふは一の遊技慰樂の如くにして實は禮樂にも勝れたるもの也。尤も今尙其遊技慰樂三昧の如き觀念のものも之れあるべきも、各流傳書の重なるものを檢するに、供饗の禮を第一に述べ、少くとも太極又は天圓地方などの哲學的基礎より割り出さんとせり。殊に古流に至つては全然根底を佛教理論にをきて風流を第二に見たるは事實なり。又試みに未生流の傳書を見せよ、花の傳書歟、佛教の因縁ばなし歟、南無妙法蓮華經も引合に出され居れり、或は南無阿彌陀佛も引ッ張り出され居れり。此流に曰く未生流は人を教道せんが爲に生花を方便に使ふなりと、以て生花の或方面に於ては宗教的に布道して其勢力を張らんとしたるを知る可し。されば其頃各宗に於ても自宗に花務職なるものを置いて、其花道師を利用

る。しかし吾曹が多年研究の結果に依つて之を判断せば「立華」の正統は池の坊にあるべし、所謂池の坊の生花は古流の壓迫に遭ふて作りたるものにして、生花の正統は古流にあるべしと信ずる也。

而して日寛一得の祖先小堀遠江守は徳川の旗本にして風流の士也。茶道に精通して又華道に樂む。而して池の坊は曰く小堀遠江守は我門人なりと。古流に曰く小堀遠江守は我門の出なりと。未だ其何れの出なるかを知るに苦しむ。しかし吾輩の考ふるところに依つては小堀遠江守は池の坊にも聞きたるべし、古流にも學びたるべし、而して別に一家を爲したる也。故に遠江流は池の坊の立華の血脈と、古流の系統とに依つて作られたるものなりと思ふ。然らば日寛一得の花は兩者の脈統の花なり、しかし道も未だ尙表面の事のみ、云はゞ外相承の事のみ。此時代何事に依らず系譜を尊びたりし時に於て、日寛上人も表面は此兩者合血になりし遠江流の系統者として、世間が俗に淺草遠江流と云ふに従せたりしと雖も、胸中大に然らざるものあり。何となれば彼日寛一得には日蓮より傳はりし血滴全身にみざり居たれば也。日什より傳はりし經卷相承の血管の脈々たるものありたれば也。以下少しく日寛上人の華

し、自宗教義發展の補助を爲さしむるに便したり。花務にあるものも亦各宗派の花形なりと主張して曰く、凡そ淨土宗には淨土宗の花あり、奚ぞ眞言の花形を淨土宗の佛前へ供へ奉りて喜び給はんやと、各流各々宗派の花を形象して以て佛前の法樂と心得たり、それに就て一の物語りあり、一日法華宗の僧兼々口強くて其あたりの一向宗の僧を困らせ居りしが、一日法華宗の寺に大法要を營む時、莊嚴なりとて立華の師匠を頼みて花を生けさせたり、然るに一向宗の僧此日に限り自分より法華宗の本堂に押しかけ行き、問ふて曰く、立華は何處より頼みて生けしやと、答へて池の坊なりと、一向僧曰く、さて、御僧日頃口強く念佛を興し給ふも、其立華には南無阿彌陀佛調ひ居れり、それをしも尙法華の佛前に供へて喜び給ふや、心得がたしと攻め問ひて、赤面せしめたるの事等ありと云ふ。されば各宗心ある僧どもは宗義に引合して様々に工夫し一派の花義を立つるなどするもありて、享保、元文、寛保頃より明和、安永、天明、寛政頃に至るまでは諸流勃興し。全國數百流派の家元を見るに至れり。而して日寛上人は六十歳の頃生花の技を初めて學びたりと云へば凡そ安永五六年の頃なるべく、彼の宏道流の據つて立

つとこのる袁中郎、字は宏道の著す所の「瓶史」初めて我國に入りし時(寛延元年)より凡そ三十年ばかり後の事、時恰も源氏流、東山流、青山流、未生流等の大に勃興し、漢學者が孔孟聖賢の靈前へ供ふに適切なものとして望月義想が宏道流を起せし時代に常林寺の一室に在つて彼は徐ろに遠州流を學つ、日蓮法華宗の供花を案じつゝありたり。是れ他宗供花の儀式に對抗上其時代思想としては志ある者の振ひ起る當然の愛宗的所業なりし也。彼は華の雅名を本松院一得と唱へつゝ、淺草遠州流と他人の指すに従せつゝ、實は日蓮門下の日寛として日蓮流的の供花を工夫完成したり。供華が佛教式禮上に於ける有力なる所作の一義なりせば、法華は自ら法華供華の規矩なかる可らず、日寛獨り思を茲に走せて之を成業せしもの亦是れ忠宗者の一人ならざらんや。

日寛一得、本松院と名乗る、自ら本門の本を以て義を示し、松の一字を師の雅號より享けて、風雅と出道と相連鎖して心之を樂み、得の一字に壽量品の末語佛陀の慈悲を頂き風雅に在つて信念と離れざるを誓ひし也。彼れの花には題目の五字七字ありき。事の一念三千ありき。因果不二ありき、三身即一の義ありき。本

傳を授けん。統一團までには照會あれ。

(七月東京滯在中走筆)

佐渡靈蹟紀行(二)

川崎英照

(四) 阿佛房妙宣寺
法獨り弘まらず必ず外護の力を俟つ。

本寺を開基せる日得上人は、初め遠藤爲盛と云ひ、文覺四代の孫にして從四位の上たり、承久亂の時、順德上皇此地に遷幸し給ふや隨身奉仕したりしが、上皇崩後菩提の爲め入道して阿佛房と稱し、妻千日尼と共に大の念佛信仰者なりき、然るに文永八年日蓮師流されて塚原にありと聞くや、彌陀の敵、世の惑亂者、打殺すも何の咎めかあらんとて、配所を窺ひ思ふ様、彼れ如何に豪なりとも身に寸鐵も持たざる一個の僧のみ、豈に蚊蠅を殺すに異ならんや、兎に角鎌倉天下を騒せし程の者なれば、其風采を見所説を聴くも亦一興ならんと、始めて聖人を拜し其偉風温容と正義の口輪に接して、彌陀往生の教へが未法の機にあらずと知り、前非を悔ひ直ちに聖人の弟子となり、厚く師に供養したりしが、後年其邸を捨て、本寺を創建したり、子盛綱も

宗の法義を巧に瓶花の艶紅麗白の間に應用して本佛の供奉にすゝめんとせり。基に本因坊あるは只名譽とすべきのみなれども一得日寛上人に至つては然らず、彼が法義發揚の隨便巧策として其幾分かを宗家に盡したるの事實は掩ふ可らざる事也。

於是乎。念佛宗に念佛の花あり。禪宗に禪宗の花あり、天台宗に天台の花あり、眞言に眞言の花あり、儒に儒の花あり、而して我日蓮宗流にも法華の花ありと誇稱し且つ安心し得らるゝ所以也。

故に日寛上人の花は其真相は既に遠州流を離れ居たりし也。彼の花は全然日蓮的花なりし也。而して今や日寛上人の花を知るもの本宗内に知つて之れなきは奇怪に似たれども、本宗に宗義の存續する間は日寛の工夫の花藏することあらざるべく、久しからずして第二の日寛上人出て、後を襲ふこと決して怪むに足らず。

尙忍水は、池の坊、古流、松月堂古流、遠州流、正風遠州、未生流、一陽流、青山流、東山流、源氏流、宏道流等の諸流生花を學び其義を得たり、若し、花技を知る人にして日寛上人の跡を繼がん志のある人あらば、熱心なる人に限り生花の極秘

亦出家して日滿と稱し、中老僧の一人にして本寺の二祖なり、千日尼御返事に曰く

地頭地頭、念佛者念佛者等、日蓮か庵室に晝夜立ち
そいて通ふ人もあるをまどわさんとせしめしに、阿
佛房に以つ(願)をしとわ(負)せ、夜半に度々御わた
りありし事いつの世にかわすらん、只悲母の佐渡の
國に生れかわりてあるか云々

天諸童子以爲給使、刀杖不加毒不能害の經文誠に理り也
本堂、庫裡の建築宏壯にして、寶物には御眞筆の曼
陀羅、阿佛房千日尼への消息文等數多く、且つ日野資
朝讀居中書寫の法華經あり

日野權中納言碑(妙宣寺境内) 後醍醐天皇、北條高
時の横暴を憂ひ給ひて追討の議を立て、權中納言藤原
資朝、大藏頭藤原俊基を以て謀主とならしめ給ひき、
されど不幸事中途にて破れ、資朝遂に佐渡に流さる
後七年にして後醍醐天皇隱岐に遷幸し給ふの年高時遂
に本間山城をして資朝を刺さしむ、其碑の一節に曰く
公臨刑、從容作偈曰、五蘊假成形、四大今歸空、將
首當自刎、截斷一陣風、先是大納言藤原爲景、圖滅
北條氏、事覺見捕、公見之路、慨然曰、丈夫願當如
此也、由此觀之、公之蓋斯志、固非一朝一夕、則殺

身靡悔、奚足異焉

阿新隱松(妙宣寺境外) 資朝の子、阿新九、配所の父を慕ふて止まず、母に乞ふて佐渡に渡り、本間山城入道によりて父に遇ふ事を求めて得ず、父遂に斬らるゝや、本間山城を難田城に刺さんとして能はず、即ち一子三郎を殺して其首を提げ、暗に乗して城を出てんとす、堀深くして踏へ難し、乃ち側の竹に攀づ竹挽みて隄外に伏し、因て脱れて父の墓前に供せんとせしとき、追兵來り逼る、阿新側の松樹の間に潜み免るゝを得て京師に歸る、時に年十三、後南朝に仕へて忠臣たりと

思へば順徳院の供奉者阿佛房建立の法華の道場が、忠臣志士の配所となりしも不思議の因縁にして、常磐の松の昔ゆかしく思はれて、あはれ涙の種ならずや、是より山を結ゆる事暫時にして醫王山國分寺に至る、天平九年聖武帝の勅旨にて建立せし所にして此國最古の巨刹なり、古は寺領多く台密兼學の大伽藍なりしが中世已來漸々衰へりたりといふ本尊は藥師如來にして行基の作と稱す、新穂よりの行程短かけれども趣味多き歩みに春の日も暮れかゝる頃、新町吉田屋に草鞋の紐を解さぬ

(五) 順徳帝御陵

新町は眞野灣に望む市街にして、小木、赤泊、相川への通路にあたる樞要の地なり、此地より南十町登りて、順徳帝の眞野山陵に詣づ、懐古すれば六百八十八年前即ち承久三年、後鳥羽上皇、北條の横暴を憂ひ、義時を亡ぼし君臣の道を匡さん計り給ひ、順徳上皇等之に與らせ給ふ、義時子泰時等をして大舉兵を卒ひて關に詣らしめ、遂に後鳥羽上皇を隱岐に、土御門上皇を土佐に、順徳帝を佐渡に遷し奉る、嗚呼如何に有爲轉變の世の成行とは云へ、雲の上の、やんごとなき御身を以て、漁さる海士より外は住む人もなき北海の絶島に、積む雪を窓の友として只々御還幸の日を一縷の光明と、吹く風立つ雲を見るにつけ都の空を慕ひ給ひけるを、近臣阿佛房遠藤爲盛は

君させばこゝも都と思ふにぞ

わがふる里は戀しくもなし

と御慰め奉りしぞ、あわれにも亦畏れ多し或時は近臣の御勧めに若葉色濃き八幡の里に、子規の啼くを聞召して

啼けば聞く、さけば都の戀しさに

この里すぎよ山ほととぎす

と見るもの聞くもの皆思の種ならぬはなし、わけて玉体の不自由を感じ給ふにつけ、眞野灣戀ヶ浦に立たせ給ひて、遙かに隱岐の方なる御父君後鳥羽上皇の御身の上を案じさせられて

さよ去らば磯うつ波にこと問はん

あきの方には何事かある

と宜給ひける時流名の阿佛房爲盛さへ御心の内を推しまつりて

佐渡の海戀の浦波とことわに

よすとはすれどかへる日もなし

と密かに涙の袖をしぼりしぞいとらしきかくて過させ給ふ事二十二年、最早望みの綱の絶へしにぞ、御存命無益と被仰、御絶食の上、臨終の御祈請ありて、遂に仁治三年九月十二日崩御ましましぬ、聖壽時に四十有六

秋風佐渡の近海を冒して眞野山頭月影暗し、噫

山陵の御前に跪づきて思ひを遠く七百年の昔に馳せば彼れ北條の處置、もとより非なり、横暴なり、されど與へて之を論ぜんか、彼又一箇の野人のみ、況や源氏の天下を奪ひ得て日猶淺く、尾花の動くにさへ驚きやすき秩序なき時なりしかば、もし彼れに向つて一矢を

放つものあらば、即ち自家勢力保持の上に有らゆる手段を盡くして是れが撲滅を圖るは、彼れ自身の立場に於て必然的情謂に迫られたるものならん歟、嗚呼、畏多くも宮中の御企も時機未だ熟せずして効果を奏する能はざりしか、誠に慨かわしき限りなり

さるにても當時の宗教家は、果して何を爲しつゝありしぞ、凡そ宗教家は如何なる時代に於ても、人の精神界を支配すべきものならずや、其當時に於て比較的學問の素養と事理判別の能を具へ、一般國民の崇敬を蒙れる宗教者にして、尙ほ且つ彼の承久の大事を知らざりしとは抑も何事ぞ、或は知つて猶ほ顧みざりしものは何故ぞや、徒らに高遠深遠なる教義を沙汰しつゝありしといはんも、かくては畢竟無益の長物たらんのみ日蓮日本國に生れたり、豈此國を思はざらんや

との聖語を心に浮べて悱憤やる方なし

今謹みて碑文中の一節を拜すれば

御紀始達於此、遙望隱岐、慕後鳥羽上皇不已、與待臣遠藤爲盛、作歌唱和、後人取其句、改入江稱戀浦家狗吠主履加冠、九重之尊居不安、海程遙矣風濤難、汎彼柏舟泊沙灣、會て吉田松陰、憤慨、山陵の雪を拂ふて

異端邪說誣斯民、不復洪水猛獸論、苟非名維持力、人心將滅義與仁、憶昔奸賊秉國鈞、至尊蒙塵幸海濱、六十六州悉豺虎、敵愾勤王無一人、六百年後壬子春、古陵來拜遠方臣、猶喜人心意不滅、口碑於今傳事新、同し心の一行は

不忍承久事、逆還犯天時 來拜山陵古、聲々鳥語悲

とむらへば眞野のみさゝぎ若深く

木の間の鳥の聲もあはれに 英 照

名殘惜しけれども今宵の宿までには猶七里餘と云ふに再び新町にかへりて眞野灣の勝區を探りつゝ、其日の夕刻佐渡南海岸唯一の港なる小木町の角屋に入る

(五六) 經 島

小木の町には、安隆寺ありて蓮師朗師の舊蹟なり、小木灣を抱く西半島の傍りに矢鳥經島あり、經島は二間四面程の小島にして、其昔日朗上人塚原の師を訪ねんと、越後より舩に乗られけるが、師孝第一と云はるゝだけ、恩師の身の上氣遣はれてか、終日船頭に立ちて島に向つて妙法七字を唱へ給へるとき、乗合の人々問答め、題目を唱ふるからは正しく日蓮が一類ならん彌陀の敢許しはせじと、朗師一人を經島に捨て、舩

は忽ち小木に入りける、とり殘されし日朗師は、餘儀なくこゝを一夜の宿夜の沙風如何に寒むくとも、岸打つ波に身は奪ひ去らるゝとも、固より期する法の道、只々心にかゝるは三昧堂、濱の千鳥と鳴き明かし、翌朝漸く性善房等の救けを得て塚原へと急ぎ給ひし靈蹟とぞ、野口僧正詩あり

聲々杜宇夕 旅客水雲間

天上一輪月 低回落菰灣

翌七日、小木より荷船に乗りて佐渡南海岸を東に七里余にして松ヶ崎に到る、波靜かにして風景殊によろしく爲めに數日來の疲勞を忘れたり

(七) 御着岸、松ヶ崎

時は文永の八年十月二十八日、日蓮上人を佐渡に流すべく、上人を乗せたるその舩は漸く寺泊の津を出て

雪體々たるは天何の恨みかある、怒濤松を冒すは龍王何の怒かある、佛使日蓮上人時に柱頭に立ち遙かに本土を顧み叫べれば、憐れ北條義權よ、我を遠ざけて何するものぞ、法華の正經に依らずんば此國治まらず、日蓮は日本の柱なり、日蓮を殺すは日本の柱を斃す也、知らずや、正法なき國、柱なき家、いかて一日

の衆も持ち得ん、よしや日蓮が骨は絶島寒山に朽ち果つるとも、永く汝等の爲めに殘し置くべきものありと、ありあふ筆を取りあげて激浪の中に、南無妙法蓮華經の七字を記し給ふ、北海の水潤れざる限り、波題目の跡は永く消へざるべし

鳥は漸く近きぬ、空つく松崎の松は枝さし延べて上人を迎ふるが如し、時に聖人御歌あり

越の海八重の沙路をわけくれは

始めて見ゆる松崎のまつ

何處の松とて松に變りはなしと雖も、これが六百年前いたはしき我師を眞先きに迎へし松かと思へば

「草にも木にも成り給ふ壽量品の佛也」

てふ聖語を思ひあはせては、枝吹く風も根にうつ浪さへ身に泌みて涙なり

松崎の松のみどりに事とへば 義 禪

昔し懸しと答ふさまなり

松崎のまつに昔しをたづねては 英 照

我師懸しと人ぞ泣くかな

御擧 聖人松ヶ崎に上陸し給ふや、送りの船は歸りしも本間の迎ひ未だ來らず、冬の日は早や暮れ雪は愈々降り積れど、愁ふへさ處とてはなく、暫時打案じ居給ひ

し折柄、不思議や紫雲天にたなびくよと見ゆる間に、白髯の老翁、上人の前に現はれ、吾ころは春日明神なり、法華經の行者日蓮聖人、謹みて迎へ奉るとて、二三丁西なる大榎の洞穴に聖人を導き給ふて、御盃を奉れば、聖人恭々しく之を受けて、天日佐渡の邊土を照す身に妙法を捨てざる限り、天語童子以爲給使は無疑と喜び給ひしぞ理なり、此盃今尚松ヶ崎本行寺に寶物として藏せり、

今の榎は二代目なれども、周圍二丈五尺餘の大本にして村人は是を御榎と稱せり

血曼陀羅、かくて聖人は彼の洞穴に端座し給ひつゝ、遙かに鎌倉の空を打眺め弟子檀那は如何に過しつらん身輕法重、死身弘法、必ずや法華經を傷つけざれ、房州地下の我父母よ、法華經の御爲めなればこそ、かくは我身を捨つること、實に果報ある佛子と喜び給へよかし、と千々に想ひを回らし給へる折、一人の老嫗來りて申す様、縱令如何なる罪ありて流され給ふとは云へ、御衣めせば慈悲の僧也、船の疲れも出でぬらん、御時の物を召さずば御身にも障りあるべし、とて握飯少々づゝを供養し奉る事三日間、嗚呼何處も變らぬ人の情かなと、聖人深く喜び給ひ、塚原へ出發の砌、彼

の老祖の爲めに自ら御指の血を絞り、千高雨にも替へ難き血の曼陀羅一幅を授與し給へりと傳ふ彼の老祖こそ果報の者なれ

此老祖の家は四五右衛門とて眞言宗なり、子孫今尚存して樗の傍りに住せるを親しく訪問して、悉しく當時の事を聞きたりしが、血曼陀羅は後年或欵頭の爲めに偽はられて木綿一匹糸少々と取替へしまゝ行方知れざるよし

松ヶ崎本行寺は、もと眞言宗に屬する庵なりしが、慶長元年、京都本國寺の日禰上人渡海の砌、本尊を勸請して佛書坊と稱し、其後元和三年本行寺と改めしとぞ、寶物には日蓮聖人所持の念珠、御消息文、春日明神の盃、新羅國王筆と稱する一返首題の本尊等、數多く拜觀したり

法華經信者としての

桃中軒雲右衛門

(花房生)

桃中軒の權大教正が神道何派に屬するやを問ふこと勿れ。彼の權大教正が何等の價值に代するかをも問ふこと勿れ。而して彼は何の故に神道の教導職にあるかをも怪む勿れ。彼が教導職は笛をつくる爲にせしもの

らずや。

彼は鈴木天眼に法華經を聽けり、予も亦彼に勸むるものあり。彼近來上人の事蹟を三段に分つて、尤も顯本的に上人を卓上に活躍せしめんとすと誓ふ。予は想ふ、彼の權大教正の嚴かなる教服の上より、折伏的態度を以て徐に六百年前の大教傑露日蓮の御容を連べんことの却つて異想外に出て、愉快ならん歟。

近來世間彼に對して毀譽褒貶甚しきを見る。桃中軒たるもの、日蓮上人の塚山不動の靜心に學びて、勇氣阻喪することなく、一意猛進して彼岸に至れよ。今や聲調界は一大革命の時代なれば也。

顯本宗務廳錄事

告知

第十教區 若松市大町本行寺ヲ、全市甲賀町妙法寺ニ合併
第二教區 千葉縣千葉郡生實濱野村妙印寺ヲ、同縣全郡全村本滿寺ニ合併 (四十一年三月廿三日)
右各下記日附ヲ以テ台寺ノ認許ヲ得タリ

明治四十一年六月

顯本法華宗宗務廳

ならずやと護む勿れ。予輩は彼が權大教正であるとも將た無くとも、只後が法華信者として、日蓮上人の崇拜者として、改良的思想に富める藝人雲右衛門を認むる而已。彼が教正であらんと少講義であらんとも乃至赤裸々たる雲右衛門であらんとも、彼の一ツ口、全七舌より連べ立つる獨流節なるものが何等高くも低くもならぬものなれば也。

彼の舊來の如何なるかは、宗教家の忘るゝ所、只彼が爾今以後の行動は即ち我等の信認するところ也。彼は好て赤穂義士銘々傳を語る。彼は義士の美なる行動を語りつゝある間に、已れ自から已れの言動に感激せり彼は大石良雄以下の義士の忠魂義膽を述べつゝ、其語る人物に接すること繁くして、全く良雄等以下の教化を受けたれば也。而して彼は良雄等に教化を受けつゝあるが如く日蓮上人よりも日朝上人よりも乃至四條金吾等よりも亦全じく教化を受けたり。彼は曾て日蓮上人の一代記を演ぜり。彼は如來使の熱烈なる行動、師弟信末の間柄の悲にして密なるを語りて、聽く者を泣せつゝ、已れも亦感泣したる一人也。彼は日蓮上人の一代を語りて已れ語る口舌の上の上人の法華經を聞き爲に其れが感化を受けたる信徒の一人なり。豈面白き事にあ

異動報告

改名暨雄(六、二二許可) 齊藤義隆 齊藤 留次郎
死亡(七、一) 八區長漸寺住 川上 榮教
任第三區布教師 權大學統 秋葉 日度
願解第三教區布教師 權僧都 木村 乾中
改名日斌(七、八許可) 本多日生徒弟 國友 文次郎
叙權僧都 文學士 全 人
任十四區了圓寺住(以上七、八) 權僧都 全 人

雜報

●夏期講習會の狀況 前號誌上に報じたる小石川茗谷學園に於ける本多日生師の「開目抄」の講義は、本月一日より六日まで毎日三時間づゝ講演あり、上下二卷の大論篇は固よりかゝる短時間を以て講了すべくもあらざるが、幸にその三分一は文々句々に就いて講演せられ、殘部はその科段を示して概要を宣示せられたり又上野不忍池辨天堂に催せる大日本佛教青年會に於ける本多講師は、本月十二、十三の兩日前後五時間、妙法華經如來壽量品の題下に、緒言、來意、要義(三身の相即と常住、三輪の統一と當位、淨土の實義、本佛と吾人との關係、得益の實義、統一の當位)釋題、科段入文解釋等、順次講述せられたり
又前記茗谷學園にて講演せられたる開目抄の續講を此際引續き講述せられんことを、有志者より發願し、幸

に本多講師の承諾を得て、来る七月廿七日より向ふ十日間淺草區北清島町常林寺を會場として、本宗在京寺院を中心とし、若谷學園の賛同の下に引續き講義會を開催せらるゝといふ、その求道の熱誠真に欣慕に堪へざるなり

●品川教信 例月十二日は妙國寺に於て、廿七日は本光寺又は妙蓮寺に於て、公開演説を催しつゝあることは、先きに報道せしが、尙ほ去る五月より毎月五日廿三日の兩夜、北馬場の篤信家石川うめ氏の宅に於て品川正法護持會員の組織せる宗義研究會の會員並に品川寺院諸師出席して、統一主義の演説を公開しつゝあるが、毎會好況を呈し來りたるは喜ぶべき現象なりといふべし

●國友日斌師の晋山 東京帝國大學文科哲學科に入りて多年宗教學の研鑽に盡瘁せし本誌同人國友茨花君は、今回目出度その業を卒へ、文學士として將た本宗正教師として自今我が宗團に身を投じ、年來の蘊蓄を傾けて實際の活動に従事せらるることとなりしは、吾人の最も悦ぶ所にして、即ち別項掲載せる如く去る八日京都府綾部町了圓寺に晋山せられ、十三日その晋山式を舉行し、紀念佛教大演説會を開き、京都總本山より野口僧正等會合せられたりといふ、茲に師の初陣を祝し併せて將來の活動健闘を祈る

●京都教信 (鈴木淡水報) 總本山妙滿寺に於ては、五月十三日午後一時より國光婦人會例會を開き(法華

七月二日五條阪上行寺例會

日蓮上人遺文に就て 銀井乾升 異体同心 鈴木孝碩

七月十五日千本壽量寺例會 人類之生存 山田繁三郎 時 河合徳次郎

七月十八日日本山例會 如來の大慈悲 銀井乾升 悉多太子成道に就て 鈴木孝碩

七月廿六日高辻久遠寺例會 吾人の責任 國友日斌 紙圖榮 野口部長

各所共來聽者多く午後十時閉會

●岡山通信 篤信會演説 津山より山名木信君を聘し

五月廿三日本行寺に開く聽衆百餘名 法華經より讀たる人馬 松崎孝成 富位即妙 山名木信

六月廿二日開會、本行寺庫裡建築中とて今回は内山下弘通所を會場に充つ、當日降雨の爲め聽衆例會に比し

少なかりしも、熱誠なる士女數十名集まる

●國友日斌師來岡 六月廿九日夜國友日斌師の來岡あり

七月一日夜當地信徒一同弘通所に師を歡迎す、席上師の信仰上の法話あり、主客法雨に沾ひて十二時頃散會

せり、越て四日午後八時日蓮研究會は師を聘す、師は「予の日蓮研究の歷程」と題して殆ど二時間に亘り師が

幻時より今の信仰に移る迄の歷程を各種の方面より熱心に演説され、聖祖上人の主義信念研究の針路を示さ

の妙用) 銀井乾升(人生と宗教) 鈴木孝碩の法話にて參詣者多く午後四時散會せり

五月十八日午後七時より本山講堂に於て佛教大演説會を開く

我此土安穩 銀井 乾升 遣使通告 鈴木孝碩

五月廿一日午後七時より千本五辻壽量寺に於て二樂會例會を開く、此日聽衆者少數なりしも熱心に謹聽せり

●開會の詩 河合徳次郎 吾人の信仰 鈴木孝碩

六月二日午後七時五條阪上行寺例會 破邪顯正 銀井乾升 佛院の慈悲 鈴木孝碩

六月十五日午後七時千本壽量寺に於て 因果論 銀井乾升 佛徒の水鏡 河合徳次郎

六月十八日午後七時本山講堂に於て開會 信念の要義 川崎英照 信仰に就て 山田繁三郎

六月廿一日午後七時より千本五辻壽量寺に於て開會 信仰の心得 鈴木孝碩 超常識信仰 紀野 俊禮

●和氣通信 今回國友日斌師來和せられたるに付信徒有志十數名相會し、本月六日午後五時より當地本成寺に於て師の爲めに大學卒業及び本宗僧員に加はられたる祝賀會を開く、同夜八時より婦人會より師に講演を乞ひ、右終て餘興として吉岡旭翁氏の筑琵琶彈奏あり、來會者二百餘名非常に盛況を極めたり(三水生報)

●學林の現狀 本宗大學林にては、本月上旬豫科普通科の學年試驗を舉行し、又千葉縣支學林にては、六月下旬豫科生の學年試驗あり、孰れも好成績なりしといふ、因に大學林にては、小林大僧正現下は去る五月中老体の故を以て辭職せられ、今成僧正その後を承け爾來學政の方針等學務委員と協定の上漸次刷新發展を期せらるると聞く、悦ぶべきことなり

一會員は本宗僧侶に限る。一本會は毎月十三日午後三時より妙滿寺方式に集會す。一會員は各自問題を提出する事を得

教學財團公告

教學財團基金寄附申込表(第廿一回) 品川支所

金壹圓三十錢 初、千葉縣安房國鴨川町 新宮 嘉作

金貳拾圓 京都寺町二條成院院檀家 四方 勝海

金貳拾圓 下村萬次郎 金拾五圓 大槻九郎兵衛

金貳圓(追加) 千葉縣長生郡長柄村廣福寺檀家 木島繁三郎

金拾圓 全縣全郡關村本盛寺檀家總代人 島山巳代七

同縣千葉郡生實濱野村本滿寺檀家(四) 全中村庄七

統一

第百六十二號

昭和三十年二月十四日 第三號 國民新聞社 (第百六十二號)